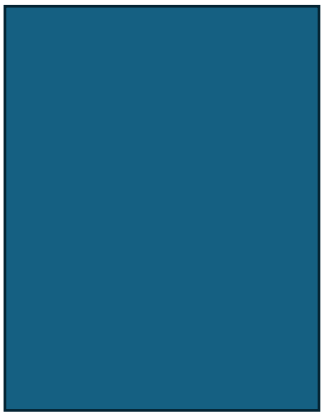
こんなものを読んできた（36）

駄犬「誰が勇者を殺したか」（角川スニーカー文庫）

校長・鈴木 健

ここのところ歴史小説が２回続いたので、今回はラノベにしました。

人間と魔族の戦いが続く世界、魔族に押されて危機にある王国が、魔王を倒すために送り込んだ勇者パーティーが魔王を倒すことに成功します。勇者パーティーは王都に凱旋するのですが、その中に勇者の姿はありませんでした。勇者パーティーは全員ぼろぼろになりながらも、魔王の城に潜入したのですが、そこで勇者は魔王と相打ちになったというのです。



勇者は偉業を成し遂げた者として讃えられましたが、この国の王女はこの説明に納得しませんでした。王女は勇者が討伐に成功したときには勇者と婚約することになっていたのですが、勇者は討伐に出発するとき、王女に「魔王は必ず倒します。でも僕は帰りませんから、安心して好きな人と結婚してください」と言い残していたからです。

その数年後、王女は勇者の偉業を讃える公式記録を編纂する事業を立ち上げ、勇者は本当に死んだのか、死んだとしたらどのように死んだのか、生きているとしたらどこにいるのか、を調べ始めます。

この構成がすごく見事です。勇者が魔王を討伐に行くというテンプレを使っているのに、物語が始まった時点ではもう魔王との戦いは終わってしまっている、というところで、いきなり読者に肩透かしを食わせます。次に、王女が勇者について、関係者に次々とインタビューしていくうちに、最初は何とも漠然としていた勇者の人柄や姿が徐々にと浮かび上がっていくところも実に巧みです。

よくある「ざまぁ」物のように、型にはまった悪役を一方的にやっつけるような話ではなく、登場人物の一人ひとりが、きちんと造形されているのもいい感じです。そして、いろいろな人の視線から語られた物語は、心温まるラストシーンになだれ込みます。

あとがきによれば、作者の駄犬はこの作品を書いた時点で４５歳と、あまり若い人ではないようですが、あとがきの中で、自分は小説家になりたいのではなく「すごい小説家」になりたいのだと言っています。志の高いひとです。文章もいわゆるラノベ文体ではなく、作者の個性を感じさせる格調の高いものです。またむやみに長くならないで話をまとめているのもいいところです。

この作者には「モンスターの肉を食っていたら王位についた件」という作品もあります。ある国の王子が毒殺されるのを恐れ、やむを得ず自分で狩ったモンスターの肉を食べていたら、いつの間にかものすごい強さを手に入れてしまいます。本人は争いを好まないのに、その強さを崇める周囲の人間の手で、いつの間にかに王様に祭り上げられてしまうというドタバタコメディーで、こちらもすごく面白いです。

この人の作品をもう少し読んでみようか、と思わせる力のある作者です（ペンネームはひどいというか、すごいというかですが…）。